
ウェルとリエル

松山 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウェルとリエル

【Nコード】

N0615E

【作者名】

松山 豊

【あらすじ】

四肢のないが、心が豊かなりエル。美しい容姿をもつ姉のウェル。その姉妹が探しているのは、「母親の音楽」。各地を巡り、二人は人の弱さ、脆さの中に、人の強さを知り、多くの音楽に触れていく物語。

第一話 「美しい人々」

「美しい人」

門に手を添えた。

木製の古い門で、朝日に照らされてはいるが、しっとりとした湿り気があり、その手触りはヒンヤリとして冷たい。それは、朝露を乾かすような清風のせいなのかもしれないが、しばらく手を添えてみると、徐々に暖かくなっていくのが分かってきた。

両手でそつと押し開けていく。

木と木が擦れて鼓膜を搔くような古い音が静かに鳴るが、それでも滞りなく、門は開いていった。

市場、だろうか。早朝だというのに、人がわんさと群れている。

実に楽しそうに声を張り上げて、商売をする露店が所狭ましとならんでいた。

リュックに納まった少女は目を輝かせ、ジタバタと暴れずにはいられない様子である。

「うわああ…！ とてもにぎやかだねえ！ あ！ ウェル、ウェル！ あつちから食べ物のおいがっ！」

くんくん…くんくんくん！

少女は、リュックから身を乗り出して匂いを必死に拾っている。

「…リエル、そんなに暴れたら落ちる…。」

鼻をヒクヒクと動かす少女の後頭部辺りから、透き通る声が出た。忠告のようで、どこか言葉には心配の色がある。声の主の整った顔は無表情で、冷たく、まだ若い。

紺青の長髪に、紺青の瞳。

冷静沈着な印象を与える、病弱そうな顔立ちである。真っ白な長袖のワンピースに袖を通し、その袖はユラユラと上品に揺れていた。ウェルと呼ばれた麗人は、胸元にさげたリュックに、先ほどから忠

告を無視して匂いを拾い続ける妹をぶら下げていた。

妹の名はリエル。リュックから顔だけを突き出して、姉と同色の短い髪を振るって、元気にはしゃいでいた。活気に溢れる市場を見る瞳は大きく、紺青色で、どこか小動物のような愛しさを持っていた。

「リエル…本当に落ちるよ…？」

ウエルの二回目の忠告である。

リエルは鼻を動かすのをやめると、つまらなさそうに唸った。

「むう…落ちないよお…ウエルはすぐそういうこというんだから…」

「…この前は落ちた…」

そう反論が帰ってくると、リエルは言葉をつまらせ、短く切った襟足をプイッとひるがえして、ふくれ面になってしまった。

面白くない、ウエルなんか嫌いだ。

言葉にしなくても、リエルの顔にはそう書いてあった。

ウエルは、人ごみに向かってスルスルと歩み始めた。胸元にさげたリュックをグイッとかけなおし、拗ねたりエルを無視するように活気盛んな市場に溶け込んでいった。

再び、食欲をそそる香りがリエルの鼻をくすぐったのは、それから間もなくのことである。

「ああー！ ウエル、ウエル！ あっち！ あっちから食べ物のおいがっ！」

悲壮な表情で再び訴えたが、ウエルの足取りは無関心に別の方角へ進み続けるばかり。リュックの中でリエルは子供のように癩癪を起し、高い声でピーピーとわめいた。

「ちよつとウエル！ 無視しないでよ！ ウエルのバカ！ 鈍感！ 鬼！ おなか減ったよう…！ はやく、はやく、はやく、はやく、はやく、はやく食べたい！」

「リエル…まずは宿が先…お昼はまだ…」

あまりに激憤するリエルに、冷静にあやす口調でそう云うが、聞く耳を持たない。

「宿なんか後でいいよ！ ほら！ 先にご飯食べなくちゃ！ ああ…匂いが…消えていくよ…ハムサンドが…ハムサンドが…」

この世の絶望を一驚に引き受けた。

いまのリエルなら云いかねない一文である。

ウエルの胸元がおとなしくなったことが助けたか、宿を午前中に見つけることができた。もっとも、その建物が宿と名乗れるのかは、甚だ疑問でしかなかった。

宿はこの町の一番奥にあった。

一軒家の小さな宿である。

小汚い。この一言に尽きる独特の色を持っている。それはリエルの空腹感も、憤りもかき消すほどである。

ウエルはいつでも冷静であるから、特に問題ないという相貌を崩さない。リエルがどんなに嫌がろうとも、ここにしか宿はなかった。また探しにいくのには、時間が無い。

背に腹は変えられない思いを胸に、宿の扉を開けると、ウエルのヒザにも満たない小さなカウンターが正面にあった。

「お！ いらつしやい。」

カウンターには小人が座っている。

彼は機嫌よくヒゲを掻き毟って、声をかけてきた。どうやら宿屋の店員らしい。

この小人をよそに、高すぎる天井をリエルは仰ぎ、綺麗に掃除された室内に感激の声をあげた。外からは想像もしない、真っ白で埃の一つを見つける方が大変そうな室内である。

店員はケタケタと笑い、小さなカウンターを飛び越えると、二人の前にチョコンと立ち、三頭身の体を丁寧に折ってお辞儀をした。

「ようこそ！ この街一番の宿屋へ。」

「ど、どうも。」

リエルはどきまぎして返事をするが、ウエルの身長が高すぎて店員の顔が実はよく見えなかった。

ウエルはヒザを折り、店員の顔が見える高さに落ちつくと、淡々とした調子で、あの透き通った声を発した。

「あの…この宿主さんですか…？」

「んあ？ ああ。そうだが？」

「…よかつたら…一晩泊めていただきたいのですが…。」

「なにいつてんだい！ 泊まるための宿だろうが！ 泊まっていきな！ いい部屋は早いもの勝ちだぜ！」

小さい体を左右に振りながら、店員は会談に向かってテケテケと走り出した。体の半分ほどもある階段を飛び跳ねてのぼり、振り返ると、

「オラオラ！ 早く来なつて！ 案内するよ！」

小さな体にマツチした腕を、パタパタと素早く羽ばたかせて手まねきした。店員は再び背をむけ、ピョンピョンと跳ねていく。

「なんか、面白い街だね、ウエル。」

「…うん、面白い…。」

急ぐわけでもなく、一段一段、二人は靴音と共に上がっていった。「オラ。この部屋が一番上等だ。値段も他の部屋と変わりはいしねえよ。ここがお勧めだぜ。」

階段を上ったすぐそこには開け放った扉があり、外観からは想像もつかない雅やかな部屋が広がっている。

店員は自慢げに腰に手をあて、鼻を鳴らして開け放った部屋の前に立っていた。

四人で泊まる事は容易だろう。そんな期待を抱くことに違和感を覚えないくらいに、部屋は大きかった。

リエルとウエルが一緒に寝てもゆつたりしているベッド。湯船のついた浴室。鼻をくすぐるようなハーブの香りが、気にならない程度に施されている。感激してリエルは甘いため息をつかずにはいられなかった。

「す…すごい部屋だね。」

「で？ どうするんだ？ 泊まるか？」

リエルとウエルの答えは決まっていた。

顔を見合わせて頷く。鋭い目つきを店員に突き刺すと、二人は同時に声を合わせた。

「宿代はいくら？」

宿が決まった二人は荷を置いて、日の高くなった市場に、再び足を運んでいた。

荷、といっても、ウエルの持っていたギターケース。それだけしかなかった。金はリエルが管理しているので、荷のうちに入ることはない。

市場は変わらぬ活気に包まれていた。それもそのはずだ。今は昼飯時である。リエルの好む香りで、周囲は覆い尽くされていた。

「いやー… やつと来れたね。もうお腹ポコポコだよお…」

ポコポコってなに？

常人である人なら触れずにはいられないところだ。しかし、ウエルにはそんなものは通用しない。悲しいかな、そのような感情は持ち合わせていないらしい。

「あ、ポコポコっていうのはね、ペコペコよりペコペコって意味で……」

このように、リエルは自分の考案した奇形語を解説する現状に満足するしかない。

それでもリエルは上機嫌で、縁日の露店を回るようにはしゃいでいた。お目当てのハムサンド（食べ物。肉に粉末状の小麦が挟まっている。）を発見した時には、もう手がつけられない。ウエルは、暴れ馬の如く乱れるリエルを前に、ハノ字に眉をひそめることもなく露店の店員に声をかけた。

「…すいません…」

「はいよお！」

店員には目が三つあった。特にどうというわけもない、というようにウエルは二枚ハムサンドを購入した。

「毎度あり！」

店員は親切にハムサンドをウエルに手渡してくれた。しかし、額に位置する眼球だけがギョロギョロ休むことなく動き、他の客をとらえては店員の顔をそこにいざなっていた。

「うまああい……」

リエルは今、幸せの絶頂である。

なにがうまいのか。当然、ハムサンドだ。

もちろん二枚ともリエルの腹に納まった。その間、ウエルは黙ってリエルの手となり、ハムサンドを食べ易い位置に運んでやっていたのは云うまでもない。

リエルが二枚のハムサンドを食べ終えるのに、そう時間は掛からず、ウエルはいまだに腹をひねるようないい香りが漂う市場を歩いている。

「はあ…美味しかった！ 次は何を食べようかなあ……」

「……まだ食べるの……？」

リエルの指揮の下、二人は次なる店に顔を出した。

「はい！ いらっしやい！」

今度は、四本の手がしきりに仕事をこなしている店員に出会った。一本は素早く肉を焼いている。

もう一本はその肉を挟む葉を構えて、あと二本の腕で肉を切りわけていた。

「うちのステーキはうまいよ！」

リエルとウエルを目にした四本の腕を有する店員は、商売用の高い声をだした。

すかさずリエルは、リュックから落ちそうになりながらも、輝いた瞳で『ステーキ』なるものに注目した。

「うわあ！ なにこれ、なにこれ！ すごく美味しそうなおい！」

店員いわく、『ステーキ』なるものは臭い肉を使用するため、肉だけを食べると吐き気をもよおすらしい。そのため、ハーブで挟んで食べるわけだ。

「えー？　こんなに美味しそうなのに？　お肉だけじゃ食べたらダメなの？」

一度思い立ったりリエルの考えを変えるのは、恐らくこの世界の秩序を激変させることよりも難関である。

それをよく知ってか知らずか、ウエルは黙ったままりエルが店員に頼み込んで肉を取引する様子を窺っていた。

肉を受け取り、ウエルはリエルが食べ易い位置に肉を運び、リエルの大きな口がそれを

ほおばった。

後にどうなったか。

云うもおぞましい。

悲惨で、えげつない結果になった。

リエルの入ったリュックが使い物にならなくなり、新しいリュックを買うハメになった、といえば想像がつくだろう。

「ひ…ひどい目に…あつたよ……」

ピカピカのリュックに身をおいたりリエルは、青くなった顔色でガクツと肩を落としていた。

「…自業自得…」

相変わらずウエルは冷たい。

舌治し、といった具合でリエルは懲りずにウエルを指揮し、他の店へと向かうのであった。

「…まだ食べるの…？」

次は『たこ焼き』と看板を掲げた露店である。

「おっちゃん！　たこ焼きちょうだい！」

「元気いいねえ、おチビちゃん！　一個オマケだ！」

大喜びして『たこ焼き』とやらの出来上がりを待っていたリエル。

『たこ焼き』の店員の調理する一本しかない腕の調理さばきを飽くことなくジツと見続け、今回はしきたりどおりに『たこ焼き』にタレをつけて食べた。

先ほどの『ステーキ』の二の舞になつては敵わない。

とはいつても、店員によれば、『たこ焼き』は卵にたこが入っているだけで、タレをつけなかったところでどうなる、という事はないそうだが、リエルは断固としてタレベタベタにつけて食べた。

それから、リエルとウエルはこの珍味にあふれた街を練り歩き、夕暮れまで食べ歩いた。店員は多くの者が、やはり何かが欠如していたり、多かつたり。特殊な人種が多く見られた。

中には醜い姿の住人もいたが、そんなことはどうでも良くなるほど、この街の住人は、暖かくリエルとウエルを迎えてくれたのである。

日が落ちる頃には、酒場に行くことを約束するにまで、リエルとウエルは仲がよくなっていた。

「いやあ…まさか今晚一緒に飲むことになるとはねえ。面白くなってきたよお。」

リエルは満腹感からか、その笑顔はいかにも楽しげで、ワクワクし、真新しいリュックを揺らしていた。

宿までの帰路をじつくりと歩き、リエルとウエルは瞬く星を見上げた。

リンリン…。チリチリ…。

鈴の音のような星が、いつもの夜空にある。

この空を眺めていると、リエルとウエルはよく考える事があった。それは昔のこと。

母親のことである。

空の下で、今も生きているのだろうか、と取り留めのない考えが浮かんでくる。その都度、連鎖して思い出すのは、優しかった父親の言葉だった。

「いいかい。ぼくも、お母さんも。皆ひとつなんだよ。木も、水も、風も、雲も、犬も、猫も…。皆この一つの命とつながってできているんだ。決して独りだなんて思わないでね。もしもつらくなったり、嬉しいことがあった時、そのときは、お星様に言えばいい…。きつ

と、黙って聞いてくれるよ。」

父は戦争でこの世を去り、母は二人を捨てた。結果、二人はこうして旅をしている。

ギターケース片手に、音楽を生業として旅を続けているのだ。いままで訪れた街、国は数知れない。いま訪れた街も、そのうちの一つなのである。

その晩、二人は招待された酒場に足を運んだ。リエルとウエルが宿をとった、すぐそこに酒場はあった。約束の時間は夕刻。すでに日はしずみ、海の中に身を投じたように、冷たく暗い空気がただよっている。その中に、一際目立つやんわりとした光を放つ酒場。

外に漏れるのは、時おりふらつくランプの柔軟な明かりと、人々の楽しそうな歌声、笑い声である。

扉を片手で押し開けると、そこには市場で見かけた店員がたくさんいた。

「おお！ 来たか、来たか！」

「待ってたぜえ！」

「こつち来て一緒に飲もうや！」

「ささっ！ こつちだ、こつちだ！」

片目しかない店員。

手が四本ある店員。

片手しかない店員。

目が三つある店員。

他にも、酒場が埋まるほどの住民が、この酒場に来ている。座るところがほとんどないのである。

皆が入ってきた二人に手を振っている。

誰もが個性あふれる体系と、暖かい心をもっていた。

招かれるままに二人は酒場の奥へと進み、用意されたテーブルに腰を下ろした。

ウエルは腰を下ろした際、リエルを胸元から降ろしてテーブル上

に置いた。絶妙なバランスで垂直にリエルは立ち、どこからか運ばれてきた自分とそう変わらぬ大きさの酒瓶に口をつけようとしていた。

「おい、おい。お嬢ちゃん、酒は飲めんだろうに。」

隣に座っていた毛むくじやらの男はそう力強く笑ったが、リエルは鼻をならして男を睨みつけた。

「なんだと！ これでも俺はウエルと同じ年なんだぞ！ 双子だぞ！ 酒くらい飲めるもん！」

にわかには信じられない子供の戯言のようだが、ウエルもウンウンと頷いてリエルの言葉が真実であることを、ウエルなりに意思表示していた。

毛むくじやらの男も含めて、近辺にいた住人は口に手をあてて驚いていた。

「なんと！ 本当なのか！ こりやたまげたよ……。」

驚かない方が不自然である。

なにしろ二人は似ても似つかないのだから。それにここは盛会の場である。驚きはやがて笑顔に変わり、リエルとウエルも酒を口に始めた。

リエルは一口含んだ次の瞬間には酔いがまわっている様子だった。フラリフラリとリュックに納まったままの体で、テーブルを危なっかしく動き回る。だが、たいした距離を移動するわけではないので、危険度も知れたものであった。

一方ウエルは無心に酒を飲み干していく。顔色一つ変わらない。

グビグビ。ゴトン。

「おかわり……。」

グビグビ。ゴトン。

「おかわり……。」

機械的にその作業を繰り返し、周囲の驚きの視線を集めていた。ウエルはそれから次々と酒を胃に放り投げていったが、一向に酔いがまわる様子はない。

笑い声が、四方八方から飛び交う。

手を叩く音。話し声。

シワくちやの顔。笑顔が笑顔をつないでいく。リエルもその中に交わり、テーブルの上で上機嫌に踊った。手拍子に合わせてクルクルクルクル…。

回って回って、心も踊る。一人、また一人と席を立ち、一緒になって踊りだす。それを見た人からまた、笑顔がこぼれてつながっていく。

「ウエル、ウエル！ あれやって、あれ！」

そう聞き取ったウエルは飲んでいた酒を乱暴に置くと、平静を保った顔とは裏腹に、おぼつかない足取りで酒場を出て行く。

「おや？ リエルさん、ウエルさんはどこにいったんだ？」

一つ目の住民が首をかしげた。それにつられて数人、同じように首をかしげる。

「ああ。ギターケースとりにいったんだよ！」

確信をもってリエルはそう云った。しばらくすると、本当にウエルはギターケースを携えて、フラフラしながら帰ってきた。あまりに不安定なので、何人もの住民が手を貸そうと立ち上がる。

「…ろってりたよ…リイル…」

どうやら一応酔っているらしいことが住民にもわかるほど、ウエルの舌は動いていなかった。そんなウエルの姿を見ても、なお楽しそうにリエルは踊り続けていた。

ウエルはドカリと椅子に座り込むと、ギターケースを開け放ち、ギターを取り出した。住民の中にはギターを見たことが無い者もいるようで、物珍しそうに眺め、どよめく。そんな住民のどよめきを無視して、ウエルはそつとギターを華奢な足の上に置き、美しい姿勢で構えた。瞳を閉じる。

ウエルの指先が弦を叩き、軽快なギター音が店内に広がった。

リエルのダンスもより軽やかになり、周囲の人々を巻き込んだ。

あちこちからの歓声は、より店内の温度をあげていく。

床が抜けるのではないかと店主が危惧するほどに、総立ちで皆が踊りだす。

どこからともなく、耳に届きやすい笛の音が入り込んでくる。それはより人々の心を躍らせるリズムを刻んでいる。

すると今度は机を叩く豪快な太鼓が鳴り始める。

机を叩く太鼓のリズムに、細い棒を立てて叩いたような音が入ってきた。

「たのしー！」

楽しさのあまり、リエルは叫んだ。

人々は手をつないで回ったり、小刻みに弾み、肩を組んで横に揺れたり、手を組んで足を右へ、左へ！

机に乗った男女が一緒に回っては笑い声をあげる！

そうでなくても、笑い声は常に耳に入ってくる！

店内はごちゃごちゃと蠢く人でいっぱいになった。

たのしい。気持ちいい。もっと踊ろう。

もっと笑おう！

外の星はしずかに瞬いて美しい。

宴は夜が更けてもなお続く。

静まり返ったのは、もう東の空が明るくなった、朝の兆しを迎える頃であった。

人々は、思い思いに寝っ転がり、気持ちよさそうな顔だ。

その中に、あのリエルの幼い顔も、ウエルの整った顔も、実に自然に紛れ込んでいた。

誰かが自分を抱きしめていた。細く、長い腕。繊細な指。嗅ぎ慣れた髪の香り。

自分が入っていた、買ったばかりのリュックは脱がされ、代わりに

シルクのような長い髪が自分にかけられているのが分かり、自分は今、あの宿屋の綺麗な部屋のベッドにいるのだということにふと気がついた。

リエルはまだまだ開ききらない瞼で、自分を抱きしめている人物を見上げた。予想はついている。よもや男とは思えない。

そこには、整いすぎたウエルの寝顔がやはり在った。静かに寝息をたてて、ヨダレを垂らすこともなく、見本のような寝顔だ。長い前髪がレースのようになり、誰でもこの芸術的な美に見とれてしまうことだろう。

そんなこの上ない美麗な顔も、リエルにとってはただの姉の顔でしかない。

なんだ、ウエルか、と安堵して、再び眠りの世界に入っていくのだった。

窓が開いている。

それはウエルが早朝に帰ってきたときに開けた。宿につくなりウエルは、リエルをリュックから出してやると、途端に胸に抱え込み、ベッドに身を投じた。

リュックはベッドのすぐ脇に無造作に放置されている。

暖かな風は、開け放った窓から、心地いい間隔をあけて、それを見計らうように通りぬける。

二人の髪を揺らし、肌を撫でて安らぐ。

ウエルの軽く長い髪は、徐々にリエルの体から解けるように退き、その体全体をあらわにしていく。

肩から下、腕はない。

股の付け根から、足はない。

つまりリエルには、四肢がない。

それぞれの末端には、白い包帯が幾重にも巻かれている。痛々しく見えるが、リエルには痛みはない。あるのは、四肢がないという事

実。リエルがリュックに納まる理由が、ここにあった。

しずまり帰った街の早朝。その街の宿で、二人は同じテンポで寝息をたてている。抱き合って、安堵した表情で。

ウエルが目をさましたのは、日もすっかり昇り、街ににぎやかさが戻った昼だった。リエルが目を覚ますまで、ウエルはリエルの小さな鼻を、ツンツン、ツンツンと突付いて遊んだ。くすぐったいのか、それとも止めてほしいのか。リエルは何度も眉をひそめ、唸るだけで、なかなか目を覚ます事はないのであった。

リエルが目を覚ましたのはそれから数刻たってからだだった。遅めの昼食をすませると、二人は明日の出発の準備をしに夕方の市場へと向かう。昨日の酒場にいた顔ぶれがそこにはあり、他愛もない世間話を交え、大抵の者は旅立つ二人に何かしらのサービスをしてくれた。おかげで、もう一つ荷物用の鞆を買うことになった。それだけの大荷物だったのである。

「おお！ リエルにウエルさんか。荷物、大変そうだな。」

そう話しかけてきたのはあの毛むくじらの男だった。酒屋でウエルの隣に座っていた男である。男はライド（四輪で、原動機が装着された乗り物。太陽の光をエネルギーに変えて走る。）の整備を生業にしていた。

「……そんなことない。」

強がりなのか、本当にそうなのか、ウエルの相貌から読み取る事はできない。しかし、他人から見れば、ウエルの担ぐ荷物は重そうに見える。例えるなら、出産したての主婦が、子を胸元にさげて買っ物の大荷物に息を切らしている。そんな光景に見えてしまうのである。

毛むくじらの男は、昨日と同じく豪快に笑って腹を叩き、ちょうど男のすぐ後ろにある旧式のライドをクイツと顎で指した。

「どうだい？ あのライド、安く買う気はないかい？」

「え！ 本当！」

耳寄りな情報に身を乗り出したのはリエルである。再び毛むくじ

やらの男は豪快に笑った。

旧式とはいっても、整備されているので形はいい。タイヤも特注品をつかっているらしく、ちょっとやそつと交換せずともいい。それは簡単に言ってしまうえば、掘り出し物の中の掘り出し物だった。

それを、この毛むくじやらの男は、ハムサンドを買うよりも安く売るといってはいないか。リエルが驚かないはずがない。

「本当にこの値段で売るのが、おっちゃん！ 後でやっぱ十倍払ってくれて言われても、俺たちそんな金ないよ？」

何度も確認をとるが、毛むくじやらの男はそんなリエルを笑い飛ばし、ライドをハムサンドよりも安く売ったのであった。

「じゃあ、リエル、ウエルさん。街を出るときにまた言ってくれ。そのときは見送るからよ！」

あまりに安く買ったので、二人には買った実感がわかなかつただろう。リエルは言った。

「な、なんで皆俺たちにそこまで優しくしてくれるんだ？」

毛むくじやらの男は、鼻で笑い、「決まっているじゃねえか……」と続けた。

「二人が俺たちを愛してくれたように、俺たちも、リエルとウエルさんを愛しただけだよ！ 俺たちには、それしかできないからな。」

翌朝、リエルとウエルは朝早くに身支度を済ませた。出発の準備はできている。朝日がようやくやり始め、しずかな街から、二人はその日、出て行くつもりだった。

宿での最後の朝食。

小人の店主は、「あのよ……」と、いいにくそうに鼻をかいだ。

「……もしよかったら、なんだが……ここに住むつもりはないか？」

「え？」

口に料理を含んでいたリエルは仰天した。が、口から料理は微塵も落とさなかった。

「この街の人間は、あんた達の事を気に入っている。俺もそうだ……」

ここで働いてもらってもいいし、それが嫌なら、二人でこの宿に住めばいい。」

小人の店主は真剣だった。リエルもウエルもまじめに話しに耳を傾けた。

「あんたらのあの音楽を聴いて楽しくなった。それは本当なんだ。だから、この街の音楽家になってもらってもいいと思う…だから…」

「すいません。」

笑顔でリエルは呟いた。小人の店主に満面の笑みを見せると、

「いい話だけど…俺たちは、まだ旅をしないと、旅をしたいから。もし、いつかどこかに住もうか考えたときは、迷わずここに帰ってくるよ。」

ウエルは黙って料理を自分の口に運び続けた。その食器の音よりも大きく、リエルは店員は笑い、お互いに納得して一回、頷いたのであった。

街にある出口も、入り口も、最初入ってきたあの門一つしかない。朝、街の住民は、リエルとウエルが旅立つことを知っていて、多くの者が門の前に集まっていた。

「また来てくれ。」

「今度また、あんた達の音楽で踊ろう！」

「待っているわ…」

「元気でな？ 怪我、するなよ？」

「困ったらいつでも帰っておいで？」

まるでそれは街の子供を送りだすようであった。皆が皆、心配そうであるが、次にまた再会する喜びも、その顔ににじませている。門を数人の男が開けてくれる。

外には草原が青々と生い茂り、遠く離れたところに丘が見える。そこには木が一本立っていた。

「…それじゃあ皆、また、来るね？」

笑顔で、リエルは声をからした。こんなにも暖かな気持ちになったのは何年ぶりだろうか。離れたくない気持ちが喉もとで暴れて、

痒くてたまらない。

ライドのキュルキュルと回る独特のエンジン音になり、いよいよ別れはすぐそこにやってきた。

「ま、また来るよ！ また来るからね！」

リエルの頬を、冷たい辛さが落ちていった。

ライドは無常にも走り出し、二人とその街の住民は別れを告げた。街の名前は『ケケラ』。そうだった。

ケケラの門が閉まり、二人を乗せたライドも、あの遠くにある丘までたどり着いた。ちょうど、丘に生えている一本の木の側で、ウエルが運転するライドは停車する。

「……リエル。そろそろ出るよ…？」

「うん…。」

リエルは名残惜しそうにケケラを見つめていた。ケケラの門が閉じている。初めてあの門を開けた時と同じ冷たい風が、やはり同じようにリエルとウエルの髪を遊んでいた。

ライドは丘を越えて、草原をさらに走っていった。しばらくいくと、目の前の青い空にひとつ、トンネルが現れた。ライドがやっと通れるほどの大きさのトンネルだ。ウエルはまっすぐにトンネルにライドを走らせていく。空はずっと続いているように見えていたが、ライドが速度を上げると、トンネルが徐々に近づいてくるのがわかる。

トンネルに入ると、人工的な白い光に包まれた。ぼんやりとした白い光。その空間を抜けると、ライドは広々とした機会音がうるさい空間に出た。

ウエルがライドのエンジンを切る。

すると、灰色をしたそのパイプだらけの空間に、音声が響いた。

「いやいや、お疲れ様です。どうでしたか？ 実に哀れな人間ばかりだったでしょう？」

嬉々とした調子で、そのアナウンスは話すが、いまいちリエルもウエルも真剣に耳へ入っていない。聞いているのかもしれないが、

右から左へと流れていつている、という様子だ。アナウンスは続ける。

「我が国では、あのような奇形物を、この施設に住まわしているわけですな。近頃奇形の人間がちらほらとでるのでね、この政策はまさに上策といえるでしょう。この施設は、そのような奇形物が住む街を体感することのできる施設なのですからね。ご希望に添えましたでしょうか？」

ライドから降りたウエルは、そのまま頑丈なつくりであろう、パイプだらけの扉にむかった。自動的に、扉が勢いよく開く。

先ほどとは一変して余計なものが無い通路を抜けて、二人はケケラでもらった荷物をしっかりと持ったまま出口へと向かった。

「それではお二人様、二日の滞在で……」

出口の手前にあるカウンターで、二人は会計を済ませる。

その額はハムサンドよりも安かった。

出口付近に、三角形のメガネをかけた長細い男が、ニコニコとして立っていた。彼がアナウンスの声の主である。

「いやいや、どうです？ 楽しかったでしょう？ 勉強になったでしょう？ アレが我が国の誇る奇形物の街です！」

三角メガネの男は高らかに声をあげ、会計をすませた二人に近づいてきた。

どうやら二人に何らかの感想を求めているようである。

「どうでした？ つまらなかったですか？ それとも、なにか御気に障りましたか？」

細い両手を広げ、ニコニコ粘ついた笑顔は崩れてはいない。

はつきり云って、三角メガネの男の声は耳障りに聞こえる。まるで耳をしつこくチクチクと刺されるようだった。

そのおかげで、リエルはどうにも返事をする気にはなれなかったのだ。そんなリエルの様子を察したのか、ウエルはあの無表情としか言いようのない冷え切った顔で向き直り、「うるさい……。」「とだけ言い残してとっとと外に足を運びだした。

三角メガネの男は引きとめようとしたが、すぐにため息を短く切ってしまった。

ライドは既に施設の外に出されていた。ケケラで買ったあのライドである。

二人はライドに乗り込むと、静かなエンジン音を鳴らし、テテイの街をのんびりと走り回った。

天気はいい。

ケケラで見た青空が、このテテイノ街にも同じようにある。

ふと、街を歩く人々に目をやれば、そこには真つ黒な紳士服を着た男がいる。真つ白なスーツを着た女がいる。だれもかれも、ツンツと鼻を高く上げたように、気取って靴の音を気にして歩いていた。互いに挨拶を交わすような事はしない。ただすれ違い、時計ばかりを気にしている。その横を、二人を乗せたライドは通り過ぎていった。

テテイの街はどこもかしこも綺麗にされていた。住宅は赤茶色のレンガで積み上げられたものばかり。とくに大きな家は、巨大な石を削ってそれをレンガの代わりにして建てられていた。

どこをどう見ても、テテイとケケラの生活は異なったものであった。なかでも、テテイの住民がリエルを見るなり目を背けたのが、もっともそう感じた理由の一つだった。リエル自身、そんな視線に気がつかうようなことはなく、ただはじめて乗るライドに静かな感激を覚えていたようだった。

ある住宅地に、ウエルがハンドルを切ったときのことである。例の如くレンガ造りの一軒家から、絶命したかのような女の叫び声が聞えてきた。

「ぎゃあああああああ！」

何事か、と思わない者などいるわけではない。あつという間にその家の前には人ばかりができていた。

リエルとウエルの二人も、すぐさま声のした一軒家の前にライドを停めた。

「なんだろう？ 今の声。」

落ち着て、リエルは一軒家を見上げてウエルに話しかけた。

「さあ……」

愛想のない会話の刹那、家から太った紳士が出てきた。

太った紳士は深々と頭をさげ、額にながれる汗を手にしたハンカチで何度も拭っている。一通り拭き終わると、顎についた肉をプルプル震わせて話し始めた。

「いああ…あの、皆様。心配には及びません。私の娘、ジュリナに子のできたのでございます。ええ…子が生まれたただけなのでございます。お騒がせして、まことに申し訳ない。どうぞ、お構いなく…お構いなく。」

人だかりはつまらなさそうに散らばっていった。中には不敵に微笑む者もいる。

リエルとウエルの二人は最後の一人が立ち去っても、ジツとして太った紳士を見ていた。

「お…おや？ お二方、どうぞお構いなく。どうぞ足をお勧めください。ささ、ささ。」

汗だくになった紳士の額を、再びハンカチが拭っている。

すると、太った紳士の後ろにある扉が開いた。出てきたのは黒いローブ着た女だった。ローブから長髪の藍色の髪が垂れ下がっている。手には…

「こ、これジュリナ！ まだ動いてはイカン！ 申告にはワシが行って来る！ お前は安静にしていなさい！」

手には、赤子がいる。いや、はつきりとは毛布にくるまれていて分らない。ただ、蠢き方、声から察するに、赤子である。

「と…父さま…私、自分で行きたいんです。自分で…自分で、この子を…」

「ならん！」

リエルとウエルがいるにも関わらず、その親と娘は口論を続ける。「こ…この子は…あのお方との子なんです…あのお方が遺して…遺

してくれた……」

「ジュリナ……だが……」

ジュリナと呼ばれる娘は、そのまだあどけなさの残る声を震わせていた。手にはしっかりと赤子を抱えている。かすかに、毛布の狭間から、子供の顔が見えた。

顔の半分が異形だった。

晴れ上がっているような、グロテスクに赤く大きい瞳だった。拳よりも大きいだろう事が容易に予想できた。

不意に、太った紳士はリエルとウエルに迫り、ウエルの肩を乱暴に押してきた。

「おい！　いつまで見ているつもりだ！　早く消えろ！」

リエルは、憤慨した紳士に噛み付いて唾を飛ばしたが、ウエルはモタモタとした動きでライドに乗り込む。

「はやく行け！」

紳士は、ヤケクソになったようにブルブル震えていった。

ライドが独特の回転音と共に唸る。

リエルとウエルの二人は紳士を睨みつけながら、その場から立ち去る。

リエルがバックミラーを見ると、ジュリナが必死に走ってくる。そのすぐ後ろには、あの太った紳士が死に際の顔をしてジュリナを追っている様だった。

「わわっ！　ウエル、ウエル！　あの人走ってる！　走ってきてる！」

リエルの声を聞くと、ウエルはライドのスピードを落とした。ジュリナの声が耳に入ってくる。

「待って……！」

かすかにそう聞える。

「そのライド！　待ってください！」

ライドのスピードを更に落とし、ジュリナと平行させた。するとジュリナはあるうことかライドに飛び乗ってきた。

「わわわっ！ あんた何やってるんだよ！」

驚くりエルをよそに、ジュリナは怯えた瞳で小型の銃器を運転席にいるリエルとウエルに向けた。

「だして！」

ウエルは待つていたように、一気にスピードを上げた。ジュリナは赤子を抱えたまま、後部座席に叩きつけられる。すぐさま体勢を立て直して、ジュリナは赤子に怪我がないか心配な面持ちになって、何度も赤子の頭を撫でていた。

ジュリナがゆっくりと振り向いた時には、あの太った紳士は跡形もなく消えていた。

さて、困ったことになったのはリエルとウエルである。これでは立派な誘拐だ。リエルはできるだけ首を後ろに折って、ライドがスピードを上げて街を駆ける音を聞きながら、懸命に叫んでジュリナに話しかけた。

「あんた！ なにしてるんだよ！」

「え…？」

ジュリナは困惑して、赤子と、小型の銃器を抱いていた。その姿は見るからに非力であった。ジュリナは俯いて、しばし思考をめぐらせているようだった。その表情は、孤独の寂しさと、心細さがあるふれだし、どうしようもなく弱い。

見かねたりエルはどうしたものかと大きなため息をついた。

「ああ、もう…とんだ荷物を乗せちゃったな…。」

「…うん。そうだね…」

二人の会話にジュリナは申し訳なさそうに肩を落とした。先ほどの勢いはどこへやら。手にしていた小型の銃器は、だらしなくぶら下がっているだけだった。

「しょうがないな…ウエル、ひとまず、どこか路地裏に入ろう。ライドで走っていたら怪しいよ。かえって目立つ。」

「…うん。わかった…」

それから細い路地に入り、ひとまずジュリナを落ち着かせるように努めた。

路地には人の影はみえない。そこは暗く、昼間の暖かさは感じられなかった。隠れるには格好の場所である。ウエルはケケラで買った大きな鞆の中から、手際よく水の入ったボトルを取り出し、フタを開けると、ジュリナに飲むように勧めた。

ジュリナは軽快して、ボトルを受け取らなかった。

「……いいです、いりません……」

「……飲んで……」

渋々、ボトルを空いた手に取ったが、やはり口には運ばない。

三人の真ん中に、しばらくの沈黙が流れた。沈黙を破ったのは、ジュリナの水を飲む音だった。

ボトルの中で、水がはじけて落ちる音が鳴る。

覚悟を決めた面持ちで、ジュリナは口を開けた。

「この子は……この子は……私と彼の、子供です……」

震える声だった。俯いて、再びロープで顔を覆い隠し、手に抱える赤子をひしと抱く。

その肩は小刻みに怯えている。

「……手放すなんて……できるわけ……ありません。あの人が……残し……」

言葉は続かず、そこで途切れた。

ジュリナはしゃくりあげている。その嗚咽だけが空っぽの空間に流れていた。

それからいくらの時間が流れただろうか。ジュリナの弾んだ肩も落ち着きを取り戻し始めていた。赤子は反して大人しく、赤子独特の言葉を途切れ途切れに発している。その姿がとてつもなく愛しく映えて、ジュリナをジワリジワリと励ましているようにも見えた。

ジュリナは再び、今度は落ち着いて話し始めた。

「……この子は奇形です……それはごまかしようがないです……。でも……私には、この坊だけが、彼とつながっている綱なんです。このテイでは、奇形の子供は皆、あの施設に入るのが規則です……それが……」

親のためであり、子のため…。そう教えられてきたんです。間違い、だとは思えません。ですが…」

「あんたが…」

リエルがジュリナの言葉に挟み込んだ。

「あんたがさ…どうしたいのか。それをハッキリさせてやらないと…。その坊やも安心できないだろ？」

「…リエルのいうとおり。」

ウエルが賛成した。

「わ…私は…」

「ほら、言ってみなよ？ 内容次第じゃ、手伝わないわけじゃない。」

暗かったジュリナの顔に、希望を見つけた輝きが見えた。それはほんのわずかな、力のみなざる兆しだった。彼女は歯を食いしばって、リエルとウエルに何度も頭を下げた。

何度も。

何度も。

そして頭を上げたそのときに、一言。

「あの施設に、この子と一緒に…」

無理難題。でも、俺でもそうするよ。

そうは思いつつも、リエルは冒険に出かける勇者のようにワクワクとして笑っていた。

「…わかった。ウエル、手伝おう。」

「…うん。」

リエルはその後、策を用意していたようにツラツラと話始めた。

松明が灯されたあの施設の扉。

扉の前には、それほど巨漢でもない門番が、留守番をしていた。手には申し訳程度の攻撃力を感じる槍。それに松明が映って、目を回してしまうような光を放っている。

一人の門番が大あくびをして、隣の相棒にケタケタと笑われてい

た、そのときである。

二人の門番の前に、深くローブを被った女が、手になにやら抱えて歩いてくるのである。

ケタケタと笑う門番が、それに気がついた。

「おいおい、あっちからだれか来るぞ？」

「ええ？　どれどれ…」

ローブの主はシタシタと、ゆっくり歩みを進めてくる。肩のなだらかな具合を見る限り、女だろう。すらりとした体が、ローブをしていても見てとれる。

一般的に、美しい女。そう表現した方が理解し易い女だった。

「…すいません。」

門番に近づいたローブの女は、ポツリと云った。

それは孤独になれた、冷たい人形の声のようだった。門番達はヒヤリと背筋を冷やして、一步、その女に近づいた。

「な…なんでしょうか？」

「この施設を見学なら、明日の朝に来てくれ。今日はもう閉めてある。」

女は押し黙ったまま、その場に冷たく立っている。聞いているのか、聞いていないのかどうかも分からない。本当に、人間なのかさえ、疑わしくなるほどに。

「お、おい…。なんとか言え。」

「そ、そうか。お前この街の住人か？」

一人の門番の声に、ゆっくりと、じっくりと女は頷いた。

「な…！　じゃあダメだ、ダメだ！」

「この施設は、他国者の見学用だ！　自国の者がはいることは許されてはいない！」

「それに女。その手に持っているもの…。まさかとは思うが…」

「…まさか、奇形の赤子か…？」

門番が手をのばして、女を捕まえようとしたが、ローブの裾はヒラリと舞い、羽ばたくように音を立てて女の逃げる軌跡を追いか

た。

女は背を見せて走り出していたのである。

二人の門番はすぐさまその女を追いかけた。

追えども、追えども、女には不思議と追いつけない。女が街の角を曲がれば、見失ってしまうのではないかと思えるほどであったが、角を曲がった女は壁に手をついて息を切っていた。

しめた。門番の二人は月明かりで女を追うが、再び女が走り始めると、やはり女には追いつくことができない。

その日は月光が幻のように美しく、いつもは暗い路地を照らしていた。影が影を追いかけて、その影はつながらない。

なかなか、つながらず、ローブの女と門番はずいぶん遠くまで走った。

ある角を曲がったとき、とうとうローブの女は行き止まりに差し掛かってしまった。角を曲がるたびに壁に手をついた息を整えていた女、のはずだった。しかし、女は行き止まりの壁を背にして、置物をおもわせるように、ピクリと動くことはない。

息をハアハアと荒々しくあげる二人の門番が、勝ち誇った顔で二ヤリと笑う。

「ハア…ハア…なんでこいつこんなに早いんだよ…ハア…」

「だ…だが、もう逃がさんぞ…ハア…」

二人の門番が、ほんのわずかに目を離れた刹那。ローブがふわりと舞っていた。

女の姿は、ない。

空にある月のすぐそこにある大きな建物にある、影。

長い髪が横に大きくなびいている。髪、のはずである。シルエットから、女はまだ手元に何かを抱きしめていた。

「…これで…大丈夫。」

女はそういった。小さく囁き、手元にあったものを投げ捨てた。門番達の元にゴトリと鈍い音がなり、ゴロリと転がってくる。

「お…！ お前なんてことを！」

駆けつけると、それは木で作られた小さな丸太だった。それが毛布でくるまれている。

門番たちが弾かれたようにあの女を見上げるが、そこにはもう、空っぽになった空に風が通っているだけだった。

「ウエルをやつ、うまくやるかな……」

施設から程よく離れた位置に、リエルはジュリナに背負われながら云った。

昼間とは一変して、その街の夜は肌寒い。赤子が凍えてしまわぬように、ジュリナは両腕で毛布ごと赤子をしっかりと抱きしめている。その真剣な眼差しの先には、自分の羽織っていたローブを着たウエルが、あの施設の門番に向かっていている光景があった。

リエルとジュリナがしばらく息を潜めて様子を見ていると、ウエルは門番を引き連れて駆けていった。

「お！ ウェルの奴うまくやったな！」

施設の前には誰もいなくなった。ただ、松明がしきりに踊っているだけだ。

「ほら、ジュリナ！ いまがチャンスだろ？ 早くいくぞ！」

「は、はい！」

リエルの声を合図に、ジュリナはトテトテと足音をたてて走った。やはり、誰もいないし、気配すら感じ取れない。ひとまず、誰かに見つかる心配は無さそうである。

施設の扉を開けようとしたが、どうにも開かない。よく見ると、

南京錠が一個ぶら下がっていた。

「ああ、もう……。面倒くさいな……」

「どうしましょう？ リエルさん……」

モタモタとはしてられない。いつ、あの門番が帰ってくるかわからない。後方を気にしながらジュリナは心配を溢れさせた顔でいったが、リエルは明るい、というか能天気な声で笑い、扉に背を向けるようにジュリナに命じた。

「こ…こうですか？」

ジュリナに背負われたリエルの背中が、施設の扉に平行になった。
「うん、うん。これでいいよ。」

ジュリナが赤子に目をやった瞬間に、背中から鉄が落ちる音がした。振り返ると、あのぶら下がっていた南京錠が落ちていた。

鍵が開いたのである。

「リエルさん！　どうやって…」

「まあまあ、そんなことは後でいいから。な？　早く中に入っちゃまおう？」

「は…はあ…」

ジュリナは不思議で頭が一杯になりながらも、抵抗感がなくなった扉の中に入っていた。

誰もいない。施設はこの国の半分を占めるほど巨大だが、入り口はさつき入ってきた一つだけ。右手には今朝リエルとウエルが会計を済ませたカウンターがある。いまは暗さのためなのか、どうにも殺風景で寂しい感じ。他に何もなく、ただカウンターの先には通路が薄暗く続いていた。

「ジュリナ、あの先が君達の行きたい場所だ。行ったら、もう戻る事は…きつとできない。」

「…はい。」

ジュリナは薄暗い通路に入った。

「これで本当にいいんだな？」

「……はい。もう…私は…」

通路はすぐに頑丈そうな扉にぶち当たった。扉はやはり開かない。

「もう…迷いません。」

開かない扉に、ジュリナは力強く云い放った。

「…わかった。じゃあ、この先にいこう。」

リエルは再びジュリナに背を向けるよう云い付けると、扉は背を向けた瞬間に重い音を鳴らした。

驚きと好奇心、それがジュリナの首を勢いよく振り返らせた。

ジュリナが背負っているリエル。そのリエルの背中には、白く浮かびあった光を放つ、翼があった。

思わず見とれてしまうほど、美しい。

翼は今にも飛び立てそうな大きさだった。ジュリナとリエルを包み込むのは、容易だということが予想できる。

翼は扉に触れただけのようだった。反動がまるでないのだ。それどころか、リエル自身、何をそんなに驚くことがあるのか、と言いたげな表情であった。

「ほらほら、いこう？」

リエルは翼を光の粉に変えながら笑顔を作った。そんな笑顔で言われては、さっきの翼に触れることもなんだかバカらしく感じてしまう。

「は、はい。」

扉の向こう側には、月明かりがやってくるトンネルがあった。ライドで駆け抜けてきたトンネル。そこを抜けて丘の上にある木を通り過ぎた頃、もうケケラの街は見えていた。皆、静かに寝静まっていた。

人が起きている灯火は、酒場にしかない。

「あそこだな。」

「…はい。」

まだまだ、風は冷たくてかなわない。でも、肌を痛めつけるような風じゃない。

ジュリナと赤子が向かおうとしている未来も、きっとこの風のようなのだろうと、リエルは思った。そして、その未来を想像すると、なぜだか楽しくなるから不思議なのである。吹きだしてしまうが、やはり考え直すと、リエルはジュリナがうらやましく思えてしまう。浮かない顔は似合わないのに。

「…ついた。」

いきなり後ろからウェルの声が聞こえた。多少驚きはしたが、問題は無い。追っ手はひとりもない。

ウエルにリエルを返すと、ジュリナは深々と頭をさげてきた。

「本当に……ここまでありがとうございました。」

感謝されてしまった。だが……

「でもな、ジュリナ。きつとコレからが大変なんだよ。誰にも頼ることなんかできない。その子をちゃんと育てるんだ。あの、近くて遠かった街でね。」

ジュリナの目は堅い。

リエルとウエルは丘の上で街に向かうジュリナを見つめていたが、すぐにトンネルへと向かった。ジュリナがケケラの門を前にしたとき、振り返ったが、そのとき丘の上には木が優しく手を振っているだけだった。

門を開けた。木製の古びた門で、月明かりでほのかに明るく青い。体で懸命に押し開けると、ひっそりとした街の先に、にぎやかな声が漏れる酒場の光が、微かにあった。

「止まれ。」

施設から出た途端、数十の矛先がリエルとウエルの二人に向けられていた。矛先の中には、さきほどウエルを追って息を切らした門番の必死な顔もあった。

「お前たち、一体何をしていた？」

声の主は矛の向こう側から聞こえる。

腕を後ろでキツチリと組み、陰険そうな眼差しでこちらを睨んでいる。

鼻のすぐ下には、くるりと細かくトグロを巻いた趣味の悪いヒゲが設けられていた。

身なりが他の兵隊とは違うところをみると、やはりそれなりの立場の者だろう。

ヒゲをいじりつつ、男はズイツと前に出てきた。

「どうなんだね？ 答えたまえ。」

話し方も偉そうだ。

「ああ、こついつの、面倒くさいよね…」

「…うん。」

嘆息してリエルが云い、ウエルはそれに賛成してうなずいた。

「何をブツブツと？ 早々に答えたま…」

ヒゲをいじったまま男は淡々とした調子で云うが、それをウエルは無視した。リエルを背中に背負いなおし、二人の顔が前後入れ替わる。

「どうしようか、ウエル。ライド、取りに行こうか？」

「…うん。」

「おいおいおい！ なんて無礼な奴らだ！ 構わん！ 捕らえよ！」
いじっていたヒゲから手を放して、号令をかけてきた。目の前にある矛が一斉に動こうとした。

カチン、コチン、カラン、チチチ…。

矛の先にある鋭利な金属部分が、すべて地を叩く音…。

兵隊が手にしているのはただの棒切のみとなっていた。開いた口がふさがらない。文字通り、兵隊はもれなく口をあけて驚愕していたが、それは矛が落ちたからではない。目の前いるリエルとウエルを包む、ほのかに輝く、白い翼が唐突に現れたからである。

眠気を誘うような風が、リエルとウエルの周囲をしきりに回り、遊んでいる。

風の音しか聞えない、この場の空気のように、ウエルの表情は静かで、後ろにいるリエルもまた、穏やかに瞼を閉じていた。

翼はリエルを軸に、のびのびと羽をのばしていった。翼が動くたびに、さわやかな風はウエルの長髪を浮き上がらせる。

「さ、ウエル。もう行こう？」

「…うん。」

ウエルが地面を軽く蹴った。

翼が空間を捕まえると、一度だけ羽ばたき、二人は空の彼方まで

瞬きのうちに消えてしまった。

残された兵隊達は、皆がため息をついた。

月明かりが染み込む夜に、棒切れが落ちる音。空には星と、月と、月の光のような翼が羽ばたいていた。もう遠すぎて、声もとどかないだろう。やがて空を見るのをやめると、あの翼の羽が何枚か落ちていた。

一人の兵隊がそれを手にして凝視したが、その羽はやがて光の粉となり、空気に混じって消えてしまった。

ウエルは右手が痛かった。仕方なく、ライドのハンドルを左手だけで持ち、短い草の茂る草原をじつくりと走っている。

「ちよつとウエル。両手でハンドル持つてよ。じゃないと危ないだろう？」

ウエルの胸元から助手席に移動させられたリエルが、口を尖らせながらばやいてくる。

「おいウエル！ 聞いているのか？」

「…聞いている…」

昨夜、テティから飛び立った後、二人は荷物を取りに隠れて戻ったのだ。しかし、如何せん再び正門から出て行くことはできない。ましてやライドがあるのである。結局、二人がとった措置は、ライドをウエルが持つて空から逃亡を計るという無造作な行為に及んだ。それがウエルの右手が痛い原因であった。その作戦の首謀者は、もちろんリエルである。逆らわないウエルもウエルだが、そんなことを今更とやかく云うウエルでもない。

快晴の空のもと、二人を乗せたライドは、その足取りを軽快なものにしていた。

ハンドルを握るのは、やはりウエルの左手だけである。二人はしばらく黙り、風の音に耳を傾けた。ふと、リエルは呟いた。

「なあ…」

「…うん」

草原の先を見据えたままウエルはアイツチをつつた。ややスピードがおちる。

「ウエルはさ、テテイとケケラ。どっちが…綺麗だと思った？」

「……………」

「俺はね、ケケラが綺麗だとは思わない。でも、テテイが綺麗だとも…絶対に思えないよ。」

「……………」

「ウエルは？」

「……………私は……………」

リエルをチラリと盗み見て、静かに微笑んだ。

「……………リエルと同じ……………」

「……………だと思ったよ。」

リエルはニヤリと子供っぽい含み笑いで答えた。

ライドのキュルキュルと何かが回転しているような、独特のエンジン音が増し、草を多く巻き上げた。

ちぎれた草は空に舞い、やがて落ちていくだろう。ときに風に吹かれて、再び舞い上がるだろう。

妹はリエル。

ケラセルフィ・アーク・リエル。

姉はウエル。

ケラセルフィ・アーク・ウエル。

いまだ、旅の途中である。

永久に続く、旅の途中である。

第二話 「安定の下」

《昼・草原で》

「おや？ こんなところで何してるんだい？お嬢さんたち。」

不意にリエルとウエルに話しかけてきたのは、老人の声だった。目が慣れてくると、顎に貯えた白く々としたヒゲが印象的な、おつとりとした老人が目の前にいることが分かった。

その老人は、ウエルが乗るライドよりも大きな荷台の上に座り、目を丸くして姉妹を優しさのこもった瞳で見つめていた。

「いや、俺たちは、これからまた旅にでるところだよ。おっちゃん
は？」

リエルは助手席から覗き込んでそう答えた。

その白ヒゲの老人は、これから品を仕入れにある国へ向かう途中だという。そこであわよくば人稼ぎしようと企てていることを、嬉々たる声で二人につらつらと聞かせた。

「そうだ。よかったら一緒にどうだい？ 旅は道ずれ、荷馬車空なら恩売りなつてね。旨い飯なら食わせてやるよ？」

老人は荷馬車に荷台にある豊富な食料を親指で差しながら云った。

リエルは朗らかに微笑み返し、ウエルは荷馬車と並んだライドのエンジンをかけた。

白いヒゲの老人は鞭を手にとると、一つ音を立てて馬を走らせた。ライドもその速度に従い、平衡して走り始めた。

「安定の下」

「なあウエル……」

リエルは目の前のある情景に驚愕していた。天にまで届きそうな大きな塔が、リエルとウエルの目の前に存在しているのである。ウエ

ルも見上げて、

「……大きいね」と表情を崩さずに、つぶやいた。

「……ウエル、本当にそう思ってるの？」

リエルが目を細くしながら振り返って疑いの目を向けると、ウエルは一度小さく頷いただけだった。

リエルはウエルの胸元にさげてあるリュックに納まっていた。首から上をチョコンとつきだし、小動物のような顔を今一度、驚愕したばかりの塔に向けた。

仰いで観るのが苦しくなるほど、その塔は巨大で、小さな国の領地に刺さるように建っていた。ライドを走らせれば、その塔の大きさが、近づくほどに増していく。

見張り台にしては大きすぎるし、城にしては細すぎる。頂上には、なぜか旗が一本、音もなくヒラヒラと風に遊ばれ、その塔の体も風に揺らされているように、フラリフラリと微かにリズムを刻んでいる。

草一つ見当たらない大地に砂煙をたてて、二人を乗せたライドは塔がささる国の城門の前に到着した。

木を縄で縫い合わせた門が一つだけあるが、見るからにひ弱そうな大きいだけのものである。

周囲を見渡してみても、小さな空き家が一つ在るだけで、空き家といっても、あまった角材を駆使して作った事が容易に想像できる陳腐なものだ。関所もない。

通常、関所を通して部外者は入国の許可をえるので、リエルとウエルはどうしたものかと一考を余儀なくされたが、そこは計画性のないリエルのする事である。やはり、

「とりあえずいってみよう！」の一言で事は丸く収まるのであった。ひとまず、ウエルは先ほど見かけた小屋の中にライドを停めておいた。

小屋の中には何もなかったので、何のために使うものなのか全く解せない。ただ、その小屋の壁には、所々黒いしみのような者が点々

とこびりついていた。

例えるなら、血潮のようだった。

門のすぐ脇に勝手口のような小さな扉が、申し訳無さそうにあった。そこには「入り口」とだけ走り書きされている。

ウエルがその扉を、横に音を立てながらこじ開けようとしたが、いささか立て付けが悪い。騒がしく音を鳴らして開けようとするが、なかなか開かない。やっとのことで腕が通るほどを開けることができる始末である。終まいに面倒くさくなったウエルは、半歩下がった刹那、その微かな隙間めがけ、横にスライド扉を綺麗に蹴り抜いた。

扉は、先ほどまでモタついていた事が嘘のように、素直にスライドして開いた。

すると、リエルとウエルの前に通行人が目丸くして歩みを止めている光景が目飛び込んできた。

ガヤガヤと瞬く間に人だかりができあがったが、リエルとウエルにとってその事はどうでもいいことのようにであった。

扉を丁寧に閉め直すと、ウエルは冷静沈着な相貌を保ったまま、人の波を掻き分けることもなく、すり抜けて人ごみの中へと溶け込んでいった。

町は外観の通りやはり狭苦しい印象をうけた。店や家が押し込まれたように隣接し、見ているだけでこちらが窮屈になっってくるが、人々は以外にも朗らかに、笑顔で生活を送っている。

リエルとウエルは宿を探すために、塔を中心として駒のように建国された国の街を歩いて回った。

リエルが昼食のハムサンド（食べ物。肉に粉末状の小麦が挟まれているもの。）を購入した際に、

「この辺にさ、宿屋ないかな？」と販売員に質問を投げかけた。

販売員の青年はリエルの事を不思議そうに眺めていたので、吃驚して高い声をあげた。

「え？ ああ、宿屋ですか？」

「そう！ 宿屋！ どこかにないかなあ？」

販売員の青年は空を見つめて、どこにあつたかなあと言わんばかりに思い出していた。

「うーん…この辺にはないけどねえ、このままずっと真っ直ぐ行つて左を見ていると、ハープっていう宿屋があるはずだ。そこに行くといいよ。最近行商人も来てないし、簡単に宿をとる事はできると思うよ。あと、それまでにきつとこの街の中心にある ボルムに通じる道が途中であるかも知れな…」

「ボウムってなんだ？」

口を挟んだのはリエルだった。販売員の青年は口をへノ字に曲げ、すぐに手を打って、

「ああ、そうか。君達は今日入国したんだったね。知らなくて当然だ…。」

「で？ で？ ボウムってなに？」リエルは興味津々と言った様子で聞き直した。

「あのね、ボルム はね、この国のシンボルなんだよ。この国がこの国である象徴。この国の建国以来、この地の人間はあのシンボルのためにがんばってきた、といつても過言じゃないね。世界のどこにいても、この国がどこにあるのか解るように。そんな願いを込めて作つたんだ。もちろん、いまでも更に高くするために頑張っているんだよ。それに、建設費は国の利益が余つたものを使うようにしているしね。あそこまで塔が高くなつたのは、俺の親父や祖父が頑張つたからなんだよ。誇りなのさ。」

「へええ…。」

感心にも似た声を上げ、リエルは仰ぐまでもなくそこに君臨する塔、ボルム に目をやった。細長い、不安定な塔だということしか、リエルには解らなかった。

販売員の青年に言われたとおり、ハープという宿屋は確かにあつた。というか、見つけずにはいられなかったと言つた方が正しい。

綺麗に飾り付けられたハーブが店の前に置かれてあり、店内にもハーブが数個ある店だ。だが、お世辞にも趣味のいい飾り付けだとは、リエルもウエルも思うことができなかった。

しかし、屋根があるだけでした。もちろん限度はあるが……。それがリエルの考えであることに変わりはないし、それに反対するウエルでもない。

店主に聞いてみれば、泊まるのはリエルとウエルの一組だけだということらしい。

姉妹は一つ返事で部屋を借りた。

それも高級な部屋を一部屋。リエルとウエルは宿に荷を託し、ギタ―ケースを手に街へと出かけていった。

街はさほど広くなくて、日が落ち始めた頃には一周して宿に帰ってきてしまった。リエルとウエルは音楽を催し金銭を頂戴しようと企てていたが、なにしろ敷地がまず無い。どこかにあるまいかと探し回った挙句、結局宿屋に帰ってきてしまったというワケである。

「……はあ……どこも空いてないなあ……ウエル、仕方がないから……もう一回りしよう?」

「……うん」

ウエルは一度頷き、静かに歩き始めた。特にあてがあるわけでもないのに、二人は街を徘徊せざるを得なかった。どこかが昼間とは景色が変わっていいのには、と可愛げな願いを胸に、リエルとウエルは赤く染まりはじめた空の下、肩を落として歩き続けた。

ふと、ボルムへと続く路地が、リエルの目に飛び込み、ウエルの歩みを止めた。

冷たく暗い路地。

ネズミが走る足音が聞こえそうな空間。

人一人がやつと通ることが出来る細い道がそこにはあった。

このとき、リエルの胸中にはひらめきに近い私意が浮かび上がったのである。リエルはしばらくこの路地を見つめていたが、やがて口を開いて、

「…ウエル、行ってみようよ…もしかしたらあの塔の下、住宅にな
っているのかもしれないよ？　だとしたらお客さんも…」と、しず
かに言い切った。ウエルに拒否するという選択肢はない。というか、
持ちえていない。

リエルとウエルは路地の中へと、身を隠すように入っていった。

静かな路地がつづき、ウエルの背中にはまだ街の明かりが差し込ん
でいるが、やがてその明かりも弱るように消えていく。

目が路地の暗さに慣れていくのがわかると、リエルはその路地の先
にあるものが一体何のか拝見しないわけにはいかないという、どこ
か使命感に似た心境になったのである。

徐々に周囲の空気が冷たくなっていく。

風がリエルとウエルの前髪を冷やし、いよいよ迫った路地の出口と
思しき隙間にたどり着くと、そこには…

「…なんだ…」「ひとか…？」「何者だ、あいつ等…」「俺たちに
何のようだろう…」「なんか持つてるぞ…」「痛いことしなかなあ
…」「こつち見たぞ…」「怖いよ…」「怖いわ…」「叩かないで…」
「痛いのは嫌だ…」「嫌だ…嫌だ…」「嫌だ…」「嫌だ…」「嫌だ
…」「嫌だ…」「嫌だ…」「嫌だ…」「嫌だ…」「嫌だ…」

人がいた。

何人もの人が暗く光の届かない　ボルム　の付近に崩れそうな住
処を構え、生きていた。その住民は次々とその住処らしき建物か
ら顔をだすと、途端に首を引っ込めて「恐ろしい…」と呟くばかり
である。外には、数人の大人たちが夕飯の支度をするために鍋を囲
んでいる最中だったが、このみすばらしい、縮こまった人間らしい
生き物が今は隅に集まって怯えている。肩を震わせ、頭を覆い、ぶ
つぶつと呟いてリエルとウエルに恐怖していた。

「どうかお助けください…鞭で叩かないでください…」怯えきった
声で数人の大人たちが横目でそう訴えてきた。もちろん隅で怯えな

からである。こちらに歩み寄ってくる者など一人もいない。

リエルは困惑して、言葉をさがしたが見つからないといった様子でウエルを見上げると、ウエルはリエルと目を見ていつものように頷いた。

「みなさん。」ウエルの声が、冷たい空気をより冷やすように響き、その声は妙に人々の心に届いたようだった。

隅で怯えていた人々や、住処に隠れた首が不規則に上がり始める。……私達は音楽家です……この手に持ったものはギターという楽器です……この楽器で、私達はあなたたちに音楽を披露してきました……どうか邪魔にならないのなら聴いてください……」そういい終えると、ウエルは近くにあった形のいびつなバケツを力カトで軽く蹴り、ひっくり返して腰を落ち着かせた。

「ちよつとウエル！ そんなのこつちは聞いてないよ！」驚いたのはリエルである。ウエルは物静かにリエルの唇に人差し指を添えて「さつき言つたよ……」とやさしく言うだけだった。ポカンとしたリエルはそのままウエルの胸元から下ろされ、ウエルの座ったバケツの足元に置かれた。ウエルは素早くギターケースからギターを取り出し、しなやかな腕の中に寝かせて、瞳をゆっくりと、閉じていった……。

「……………」

水を打ったような空気だ。

遠くから、あの街の音が聞こえる。

この空間だけが、まるで無音になってしまったようで、隔離されたようで、でも、ちっとも寂しくなくて、満たされている。

遠くの音も、声も、光すらもいない。

この冷たい住民の一人一人の心が、いままさに、リエルとウエルに捕まえられていく。

静けさの中で、ギターが、柔らかくて、体にしみこむような音色

が、小さな旋律を奏でていくと、それに続いて、アゴが浮き上がるようなリエルの歌声が、慈悲に満ちた天使の歌声が、人々の心を抱きしめて、さらに包み込み、あたたかく、痛みがある優しさで愛していくようで、その音と声は、人々の頬を湿らせる。

「……………」

音聴き終えた人々は、先ほどとは一変して、怯えてなどいなかった。むしろ、感謝の念を全身で表現するようにリエルとウエルの手をとって喜んでくれた。

「いい曲だ…」「すばらしかったよ…」「ありがとう…」

涙で皺くちやにした顔で、人々は歓喜にわいた。

リエルとウエルは、その人々から夕食の誘いを受け、これをありがたく頂戴することにした。貧相な食事ではあったが、さきほどまで感じていた寒気が、人の集まる暖かさで消えていることにリエルは気がついた。

リエルがウエルに夕食のスープを口に運んでもらい、喜色満面の笑顔でいると、一人の男が、ボサボサの髪をかいて口から夕飯をこぼしながらリエルに話しかけた。

「それにしてもいい曲だったな、また一度でもいいから聴きたいものだ！」

汚らしさにリエルは苦々しく顔を強張らせたが、どうにか笑顔をつくろい、

「あは…あはは…ありがとう…また次ね…」と力なく苦笑いを繰り返した。男の口からはなおも夕飯がこぼれ落ちていく。

「こら！ 音楽家さまが困っておられるであろう！」

火にかけた大きな鍋を囲んで、リエルとウエルを含めた大勢の人々がその声に反応し、リエルに話しかけた男を笑った。男は恥じらいをこめてまた、頭をガリガリとかいている。

「音楽家さまや、先ほどはまことにすばらしい一曲を披露していた

だき感謝に絶えぬ。ほんとうにありがとうね。心から礼をいいます。

リエルには鍋が邪魔で見えなかったが、そう言ったのはこの集落の長らしきお婆さんだった。さきほど男を注意した声の主である。腰を丸くして、その姿は鍋を挟むと完全に隠れてしまい、ウエルや大人の者にしかその姿はとらえることはできなかった。

ウエルはお婆さんに首を左右に振って否定の念を表し、スープをリエルの口に運ぶ。

「…音楽家さまや…」

リエルがスープにした頃に、お婆さんは聊かな声で呟き、ウエルはリエルの食事をしばし中断する。リエルもお婆さんの話に耳を傾けた。

「…音楽家さまは、ワシらのことをどうも思いませんか？」

質問の意味が、リエルには最初解らなかった。もちろん、ウエルにも解らない。リエルが首をかしげると、お婆さんはリエルを鍋の横から覗き見て、安らぎの混ざったようなため息を落とした。

「わしらは…この国に奴隷として連れて来られたんじゃよ…ほんの数十年前のことじゃ…」周囲のざわめきの灯火が一つずつ消えていった。

「このヘンテコな塔が、そのときには半分ほどの高さしかなくての…それを更に高くするために、わしらは奴隷としてこの国に買われたんじゃ。この国の人間は外側の街で暮らし、わしらはこの内側の街で毎日毎日塔を作って暮らした。過労から、死ぬ者の出たね…とは言え、わしらには何もできなかったから…いまの塔の建設が中止されるまで、本当に長かったと思うよ…」

鍋をかけた火が躍り、火の粉が星のように空へと昇る。

「…なんで中止されたんだ？」声を低くしていったのはリエルだった。お婆さんは瞳を閉じて口を固く結んだ。

「…わしらにわからん。ただ、ある日突然止めさせられたんじゃよ。それから…わしらは毎日街に出ては汚い仕事をして生きているよ…」

息がつまりそうな話だったとリエルは思った。と同時に、この人々に同情し、未熟な自分を呪うように俯いてしまった。

ウエルは細い指がリエルの頭を撫で、その手つきにリエルはしばしの安らぎを感じていたが、途端にボサボサの髪を有した男が立ち上がって、この息苦しかった空気をどこへと知れず吹き飛ばしてしまった。

「おれ、あんた達の音楽、もう一度聞きてえな！」

「俺もだ！」

「私も！」「僕も！」

次第に欣喜雀躍していくと、リエルの暗かった顔にも驚喜に出会ったように無意識にほころびを見せていた。

ウエルはギターを取り出し、心踊る、身が跳ねる音色を生み出し、リエルもそれにあわせて赤子が跳ねるように小躍りしながら、音の高い楽器の口真似をして更に音色を歌わせた。

人々と踊り、歌い、飛び跳ねて、リエルとウエルは疲れたままに、夜が更けてから宿に帰っていくのであった。

宿の帰る途中、真夜中にも関わらず、リエルとウエルが入ってきた門の近くで松明がいくつも灯されていた。その松明の明かりで、門の周辺は昼間のように明るく、集っている人の顔がはっきりと見えていた。リエルとウエルは物陰に潜伏し、その集団の様子をこっそりと眺めた。

「ねえ、ウエル、アレなんだと思う？」リエルが指定したのは、数人のフードをかぶった者がもつ紙切れのようなものだった。紙には文字が記されており、松明の向こう側の蔭る場所から数人のまだまだ稚い顔立ちの子供が男女問わず連れられてきた。

フードをかぶった紙を手にした男は、その子供を点検するように一人ずつ眺めたかと思うと、一発ずつ頬を引つ叩いて「次！」と低い素気無い声で言うのである。そのフードを被った男数人は、次に並んでいる子供の頬に手をのばす。

叩かれた子供は今にも、膝から崩れてしまいそうだが、他のフードを被らない男に迫られてぐつと辛そうに唇をかんでいる。

「なんだあいつらは…ひどいよ…」

「…次…」

パシッ！

「…次…」

バシッ！

リエルの心からの慨嘆も空しく、子供は一人一人頬を引っ叩かれていった。

通りぬけていくような風に松明が吹かれて揺れ動いた。

門がひとりでに開いていく。上にある巨大な綱が時間をかけて巻き上げられていき、ロープをたどった先には、門の脇の車輪を二人掛かりで巻いているのが確認できた。

門からはゾロゾロと赤いフードを被った人間が、荷馬車を引いて入って来た。その赤いフードを被った集団は、子供を物色し始め、服を脱がしたり、手を上げさせてみたり、奇妙な儀式的なことをさせた挙句に、どこからか持ち出したハンコを全員について周ったのである。

ハンコをつかれた子供たちは、肩を震わせて固まったまま、荷馬車に導かれていく。

「どうも…今回の商品は質がいいですな。小屋を使うまでもなかった。」

その荷馬車の前で、赤いフードの男が云った。恐らく赤いフード集団の責任者かなにかなのだろう。その男は、子供を引っ叩いていた男と固い握手を交わすと、互いに得たりやおうと含み笑いをこぼし、子供をすべて荷馬車に乗せたことを確認し終えると、赤いフードをかぶった集団は再び国を出ようとまばらに背を向けて歩きはじめた。

「坊や！ 坊や！」

漆黒の闇から女の声が突き抜け、声を限りに疾走してくる女がい

た。その疾走は、あまりにも無様で醜いものである。今にもつまずいて、転倒してしまいそうな頼りない走りだ。

荷馬車に乗り込んだ子供の一人が立ち上がり、即座に荷馬車から飛び降りた。男の子である。

男の子は懸命に走り、顔を寂しさでつぶしながら母親に抱きついた。そのやり取りを誰一人として止めようとはしなかった。

「坊や……！ ああ……坊や……」

「かあさん……かああさん……行きたくないよ……ぼく……行きたくないよ……」

松明はしきりにゆれていた。まるで親子を急かすようにユラユラと。

親子は気にも留めずに強く抱き合った。

「坊や……すまないねえ……」

「母さん……… かあ……さん……」

嗚咽をもらしても、涙で顔が痒くなっても、男の子は母親を呼び続けた。

何度も。何度も。男の子は母親を呼び続けた。

男の子の後ろに、松明を移すように怪しく光る鋭利な光が近づいていく。親子は黙ったまま動かないのだ。まるでそうなることが解っていたかのように。短剣を手にしていたのは、先ほど握手を交わし、少年を叩いたフードの男だ。どうやら、この商売を台無しにされかかった事に、憤り以上の憤りを感じているようである。その形相は静粛に凍てついているが、それは殺気立っている以外にない。

男の腕が天をさし、歩みを男の子のすぐ後方付近で止め、死にかけた虫を見下したような眼で立ち尽くした。

「かあ………さん……かあさん……」

「ごめんよ……坊や……ごめんよ……」

母親は男を仰ぎ見ると、子を覆い、身を挺して守ろうとした。

「どうか……どうか……どうか……」

苦しい。そんな事すら当てはまらないように、母親は苦境に耐えか

ねている。男は一つ、ため息と共に肩を落とすと、

「……逃げ」と一言だけ。

短剣で風を切り、力いっぱい振り下ろした。

音はない。血もでない。ただ、遠くで短剣が地を触る、鼓膜を震わせた音だけがある。

闇よりも黒い、漆黒よりも濃い、ウエルの黒々とした影のような長髪が、親子を守護するように風になびいていた。

ギターケースが男の顔面をとらえ、振りぬかれていた。わずかに松明の光が届くところでうつ伏せになった男の意識は、そこには無いことが見て取れる。

ウエルはゆっくりと視線を取り囲む集団に送り、親子が逃げ出したのを察すると、すぐさまギターケースに勢いを乗せ、フードを被った集団へ乱暴に投げ飛ばした。

ギターケースが混乱した回転をみせ、フードを被った集団を掻き分けていく。

ギターケースは一人の男をかすめただけで、重々しい音を鳴らし寝そべるが、壊れるような様子はない。まるで鋼鉄が地面をかくような音になったただけだった。

ウエルはすかさずワンピースのスカートをたくし上げ、太もみに忍ばせたナイフを数本手にとる、と同時に、ぶら下げたリエルを背負いなおした。

集団のうち数人が、ウエルに休む間を与えぬよう、腰に忍ばせた短剣を手に飛び掛るが、攻撃は当たらず、的確にウエルのナイフは男達の足の親指を切断していった。

赤いフードを着た集団は、逃げるように門から逃げていく。ウエルは逃がすまいと追うが、道をすぐに場内の集団に阻まれてしまった。

「どけよ！」リエルが代弁するように言うが、聞く耳を持つ者など

いるはずもない。集団は取引相手が脱出したのを見るや否や、全員でウエルに攻撃を仕掛けてきた。これにはさすがのウエルでも、どうこうできるものではない。避けることで精一杯である。しかし、ウエルは見事に全員の攻撃を踊るように一撃ももらうことなく、踊るように避け、汗一つたらさない。

もつとも、四面楚歌と化したこの状況で、分が悪い事は必死である。ウエルはリエルを軽く叩いて合図を送ると、リエルは息を大きく吸い込み、ウエルは急に逃げる足を止め、耳を完全に塞いでしまった。

集団の男の一人がウエルに向かって走り、至近距離にまで迫る。男が短剣を振りかざした、その瞬間、

「あああああああああ！！！」

耳を引きちぎられるような声が四方八方を構わず襲いはじめた。

窓は割れ、砂が弾み、耳の鼓膜を傷つける。至近距離でこの音を耳にした男は、耳を押さえてもがき、形を壊した言葉を発して泣き叫んでいた。おそらく、鼓膜が裂けた以外にないだろう。

ウエルはその隙に逃亡を図った。途中、投げ放ったギターケースを素早く手にとって。集団の男達はおぼつかない足取りでどうにか追いかけてくるが、到底追いつけるはずはない。

そこに、路地から顔を出して手招きをする一人の老婆の姿があることに気がついた。老婆はあの ボルム の下に住む、お婆さんだった。

「はやく……！ こっちへ来な！」 必死に手を振り回してお婆さんはリエルとウエルを路地に招き入れた。後方からはあの集団が夜道を駆け回る足音が、路地を通りすぎ、離れて行く。リエルとウエルは胸を撫で下ろし、互いに大きな深呼吸を設け、お婆さんに招かれるまま、路地をゆっくりと歩いた。

「お婆さん、本当に助かったよ。」 ウェルの後ろからリエルはお婆さんを覗き込んだが、お婆さんは振り返らずに、手をチラチラと振

り、明るい声を返した。

「いってことよ、あの音楽の礼さ。」

リエルとウエルと、お婆さんはそれから黙ってしばらく細く続く路地を歩いた。思ったよりも道は多岐に分かれており、リエルとウエルが最初に発見した路地とは比べ物にならないくらいこの路地は入組んでいた。光の一つも感じることの無かった路地を抜けると、先ほど皆で囲んでいた大きな鍋は姿を消し、焚き火の跡から煙が立ち昇っている光景が飛び込んでくる。

そこはリエルとウエルが夕食をご馳走になったあの広場だということが、憶測ではあったが理解することができた。お婆さんは幽霊のように足音もたてず、リエルとウエルの前に立ち、向き直る影だけを見せた。

「……いやね、先ほどの耳を痛く切りつけるような音が街の方からしたものですからな……見に行ったところ、あんたらがなにやら逃げているようだったのな……わしはこうしてかくまった訳じゃ。」

「そうだったのか、いや、こっちは助かったよ。でも、あれは何かの儀式か何かなのか？俺にはいい具合には見えなかったけど……実際、俺とウエルはこうしてやり過ぎちまったみたいだけど……」

お婆さんは何か知っていると見えて、リエルの言葉を聞くなり咳払いを一度設けると、縫い目のような唇を小刻みに動かし始めた。

「……あれは……この国が、夜になると始める闇の商売なんじゃ。」

「闇の……商売……？」

かすれた老人特有の声はリエルにも出せない声で、闇を保持しているかのようなだった。あまりの暗さに、リエルはそう頷いて答えることしかできなかったのである。

お婆さんは話を続けた。

「そう……これは闇の商売。ただ……この国がやつとる。この国が。もはや、闇の商売とはいいいがたがね……この国は、できの悪い子供を他国に奴隷として売りさばいているんだよ。どんなに頑張っている子供でも、頭が悪いと判断されるとあのザマさ。その金は、この塔

を建設する費用に当てられているようだがね……馬鹿げた話しさ……」
お婆さんの黒いシルエツトが、濃厚なため息を放っているのがわかった。

「……この国ではね、そんなことが何年も続いてるんだよ。わしらもここに来て、この国を哀れんだ事は数知れぬ。じゃが、わしらはどうにもできないのだよ……なにか……そう、なにかきっかけがあれば、わしらも……」言葉はそこで途切れ、お婆さんの影は一棟の住居へと踏み出した。

リエルとウエルがついていくと、お婆さんはその中で寝るように指示してきた。ありがたく二人はその住居に入るカーテンを裂き、お婆さんに礼を言くと、お婆さんが極微に笑って見せたように、リエルとウエルは感じた。

『パンツ』

そんな銃声が二人の眠りを妨げた。リエルとウエルはその音により起され、自分たちが眠っていた住居と想像していた部屋は物置だということが解ってきた。それよりも何よりも、リエルとウエルは外から聞こえたその銃声の方が、気になって仕方がなかった。そつとカーテンをウエルが小指でずらし、外の様子を窺う。

昨日、リエルとウエルを追いかけていた男達の顔ぶれが離れた位置に点々と在る。手には銃器が携えられ、真っ直ぐに地と平行して構えられていた。非常な銃口からは煙が描いたように生じて、八人ほどの男達の足元には、昨夜のお婆さんの亡骸が横たわってリエルとウエルを見つめていた。

「もう一度だ……もう一度だけ聞く。昨日入国した者はいないのか？」銃器を持った男達の中で一人だけ肩の位置に勲章をつけた男が叫喚呼号すわけでもなく、棒読みが如く言った。広場に集められた人々は、怯えきつて身を緊張させるばかりだ。

「いないのか……じゃあ、仕方ない。」勲章をつけた男は顎で空を切り、ズカズカと一行をひきいて広場から姿を消していった。途端に

泣き声、喚き声が広場に消沈した空気を下ろしていった。ウエルがリエルを背負い住居から出ると、真っ先にお婆さんの亡骸の側に歩み寄った。

人々の視線が二人に注がれる。中には憎しみに満ちた、頬にささるような視線もあったが、リエルとウエルは瞼をとじて、粛々としてお婆さんの見開いた眼をそつと閉じる。

数分間、二人はそのまま沈黙を守ると、ウエルは凜として立ち上がり、背中に背負ったリエルと共に、ボルムへと近づいた。

ボルム　やはり細く、大人が両手を広げて四人ほどで囲めば事足りるようなものであった。リエルの体が白銀に光り、背中から閃光が放たれた。

リエルの背中に、光沢のある翼が現れ、ボルムの足元を切断するかのように横に翼を打った。

なにもおきない。

羽が数枚、風にのっただけだった。

リエルは翼を大きく一度広げると、その翼を引き込むように背中に収めていった。リュックの裂け目に、翼が巻尺を思わせて消えていく。背中には、翼の跡かたすら残らなかった。ただ確かに、リエルとウエルを覆うように、羽は浮かび上がっていた。何枚も軽く、何の抵抗もなく。

広場の人々は悲しみも忘れ、これまでの一部始終に見入っていた。閑散した広場に向けるように、リエルは背を見せたまま口を開く。

「お婆さんが…昨日言ってたんだよ…なにかきっかけがあれば…つて。」

その台詞を置いて、リエルとウエルはあの冷たい路地へと姿を消していった。手にはギターケース。それだけを持って、なんの滞りも、阻む敵も無く、リエルとウエルは国から出ることができたのだ。あまりにもあっさりと出ることができたので、何度も背後を気にしたが、やはり追っ手などの影も見えなかった。

ライドに揺られながらリエルは振り返り、小さくなりつつある
ボ
ルム 眺めた。

ボルム の頂上にある旗は、もう見えない。

「ねえ、ウエル。」

「……何？」

ハンドルをしっかりと握り締めて、ウエルは赤土の道の先を見据
えたまま返事を返した。

「うん…あのさ…」

「…うん」

「きっかけ…に…」

リエルの言葉をかき消して、地響きが起こった。後方からである。
ライドを止めて振り返ると、ボルム が奈落に落ちていくよう
に崩れていくのが見えた。足元から、止めることもできずに崩れて
いようだ。足元の国は、すでに砂煙に覆われて見えなくなっていま
っていた。

「…なるかもしれない。でも…ならないかもしれない。それは…あ
の人たちが…決めること…」

ライドのアクセルを再びふかし、ハンドルを強くウエルは握った。
リエルは、もう一度 ボルム を見るような事はしなかった。ただ
ウエルの言葉に納得して、大人しく助手席に座って朝の風を感じる
ことにした。

ライドが走り始めると、リエルはしばし「きっかけ」について思い
をはせた。

あの不安定な塔も、あの国も、住む人々も、自分が与えた「きっか
け」によって、どれほど、何かがかわるのだろうか、と。

しばらく行くと、木陰に荷馬車が一台、昼間の東風にのんびりと
していた。木陰が木々の動きにあわせて生き物のように荷馬車を撫
でている。ウエルはライドをその荷馬車のすぐ隣で停車させた。

荷馬車の荷台から何かがムクリと起き上がった。蔭っていたのでよく見ない。

「おや？　こんなところで何してるんだい？　お嬢さんたち。」

不意にリエルとウエルに話しかけてきたのは、老人の声だった。

目が慣れてくると、顎に貯えた白く々としたヒゲが印象的な、おつとりとした老人が目の前にいることが分かった。

その老人は、ウエルが乗るライドよりも大きな荷台の上に座り、目を丸くして姉妹を優しさのこもった瞳で見つめていた。

「いや、俺たちは、これからまた旅にでるところだよ。おっちゃん
は？」

リエルは助手席から覗き込んでそう答えた。

その白ヒゲの老人は、これから品を仕入れにある国へ向かう途中だという。そこであわよくば人稼ぎしようと企てていることを、嬉々たる声で二人につらつらと聞かせた。

「そうだ。よかったら一緒にどうだい？　旅は道ずれ、荷馬車空なら恩売りなつてね。旨い飯なら食わせてやるよ？」

老人は荷馬車に荷台にある豊富な食料を親指で差しながら云った。

リエルは朗らかに微笑み返し、ウエルは荷馬車と並んだライドのエンジンをかけた。

白いヒゲの老人は鞭を手にとると、一つ音を立てて馬を走らせた。ライドもその速度に従い、平衡して走り始めた。

のどかな昼間である。

野道はひたすらに続き、清風が荷馬車よりも、ライドよりも早く走り去っていく。

リエルとウエルは老人からもらった干し肉をかじりながら、のんびりとして、老人の旅の話に耳を傾けていた。

白いヒゲの老人から、質問が飛んできた。

「君達はなぜ、何をめざして旅をしているんだい？」

リエルは答えた。

「母さんの音楽を探してるんだ。まだ見つからないけど、見つける

よ。」

どこかリエルの声は、快活と、希望に満ちているように明るかった。

妹は、ケラセルフィ・アーク・リエル。

姉は、ケラセルフィ・アーク・ウエルといった。

いまだ、旅の途中である。

永久に続く、旅の途中である。

第二話 「安定の下」(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

感想をできれば聞きたいと考えています。どうかお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0615e/>

ウェルとリエル

2010年10月28日03時10分発行